

第十章 人物

一 高崎治平

高崎治平翁は福生が生んだ偉人であると言えよう。神明社の傍にある、高崎治平翁頌徳碑は今もなお翁の徳をたたえ、後世に伝えて行くであろう。その碑文によって翁の経歴は一通り知ることができるが、更に翁の教えを受けた井上惣助氏等が編集した「高崎治平翁経歴」という冊子は一層くわしく翁の経歴を伝えている。この冊子の記事の他、翁の子息高崎弥一氏および愛弟子井上惣助氏の談話をもとにして記してみよう。

翁の生年については、安政元年一月と碑文にも冊子にも出ているが、弥一氏の話によると安政二年一月九日が正しいという。

生後約半年にして生母に別れた翁は、外祖母に育てられ、また二人の継母に仕えたという。幼時すでに辛酸を味わったのである。

その中であって少年時代から二宮尊徳翁の伝記・書物を愛読して、努力して二宮翁の如き人になろうと志したという。後年の報徳精神は既に養われていたのである。

十八才（数え年・以下年令はすべて数え年で記す）の時、父に従って製茶業を営み、その後、熊谷に隠居した父母に孝養をつくしたという。養蚕に力を注ぐようになったことについては次のような話がある。昔からこの辺は養蚕をして

いたが糸質がよい。この土地は養蚕に適するだろうと着目した翁は、カイコの改良に着手した。当時の財界は未曾有の不況にみまわれていたので、カイコの改良により困っている附近の人々を救おうと考えたものであるという。自費をもって、養蚕の先進地、長野・群馬両県を明治十六年に、群馬・長野・埼玉の各県を明治十八年に訪れ、養蚕に関するの観察研究を行なった。そして明治十九年、羽村町（当時西多摩村）の下田伊左衛門氏等と謀り、西多摩郡東部蚕糸業組合を組織して斯道の発展を図っている。その後も群馬・長野・福島の各県を訪れ、養蚕関係の研究を行なっている。

冊子の中に左の記事がある。

一、明治二十年一月下田伊左衛門氏其ノ他ノ有志ト謀リ農務局試験場習業生八隅清治氏ヲマネキ私立微粒子病検査法伝習所ヲ西多摩村ニ設ケ同法ヲ修得ス

一、明治二十一年一月西多摩郡東部私立微粒子病検査法伝習所ヲ西多摩村二・三月東秋留村二・四月福生村ニ開設シ生徒ヲ募集シ検査法ノ普及ヲ図ル

一、明治二十二年二月福生村東多摩小学校長井上令照氏ト謀リ私費ヲ補イ幻燈器械ヲ購入シ各地ニ養蚕幻燈会ヲ開催シテ初心者ヲ指導シ又養蚕期間中各地ヲ巡回シテ実地ニ飼育ノ方法ヲ教授スル等斯業ノ改良進歩ニ力ヲ致セリ
科学的研究に努力し、また、普及に尽力したかがうかがえよう。

明治二十四年、養蚕の発展を更に図るため、多数同志と共に成進社を結成して同業者の団結を固めた。養蚕を通して人々のためにつくそうという翁の念願が組織化されたものともいえよう。

翁が養蚕に関して、婦女子の教育・学校教育にも力を注いだこと、および長年にわたって積極的に研究努力したということは冊子の中の左の記事によって知ることができる。

一、明治四十一年二月東京府農會蠶業講習會ヲ福生村ニ開キ農家ノ婦女子ニ玉糸繰糸ノ技術ヲ修得セシム

二、明治四十一年十一月福生小学校校長岩村盛彰氏ト謀リ青年夜学会ニ養蠶科ヲ設ケ學理ノ大要ヲ授ク

一、大正十年関西地方ヲ視察シテ人工孵化蠶種製造法ノ研究ヲナシ同年率先該種ノ製造ヲ試ミ好評ヲ博シタルカ是レ本府下人工孵化種製造法ノ始メニシテ漸次隆盛ヲ見ルニ至レリ

安政元年生まれとして、大正十年には六十八才である。しかもなお率先努力しているのである。

終戦前の福生町農業會に發展的解消をとげた福生信用組合の創立は、明治三十一年であつた。この附近では最も古い創立である。これは信用組合法發布の一年前である。この信用組合創立に関しては次のような話がある。

當時の田村酒造の田村半十郎氏は品川弥次郎閣下と懇意であつた。品川弥次郎氏が大臣職にあつた當時、静岡県下に信用組合があつて中・下流の人々の金融機關として利用され大變評判がよかつた。それ故福生でも行なつてみてはどうかと、品川閣下から田村半十郎氏に話があつた。半十郎氏は静岡県下を視察した後、治平翁らに先に立つてやってみないかとすすめた。そこで翁は同志五十数人と共に福生信用組合を創立し、組合長の職についたのである。その後組合の第一回決算書を品川閣下に送つたところ「不信用組合にならぬよう努力せよ」という意味の激励の返書がきたので、その返書を組合の宝としたという。

碑文中に「蠶業講習所ヲ設ケ福寿館ト号シ地方斯業ノ改良ニ又諸生ノ教養ニカムルコト多年而シテ其門ニ入ルモノ遠クハ朝鮮ヨリ来リ無慮数百名ニ及ヒ以テ蠶業界ニ一新光彩ヲ添ユルニ至レリ」という一節がある。遠く朝鮮より門弟の来るに至つたことについては次のような話がある。

あるとき蠶種を朝鮮に送つたところ、あちらでも養蠶の熱が高まり、内地へ行つて研究しようということになつた。そして翁の所にも大正十一年より十三年にかけて、主として咸鏡道より弟子がやつてきた。その人々は翁の所で

研究した後、府立の試験場へ更に研究におもむいた者もあり、朝鮮に帰って斯業の発展のために活躍した者もあるという。

蚕業取締所福生支所の設立（大正十三年か十四年）は、翁らの多年の念願であつた。当時蚕業取締所が立川にはあつたものの、福生附近の人々には不便であつた。ましてや青梅線から離れた所の人々の苦勞は更にひどかつた。その人々の気持が支所設立に結集し、やがて機熟して支所の設立となつたのである。福生村および他村の有志は、建物は自分達でたてるから是非支所設立を許可してほしいと願ひ出たということである。敷地は田村半十郎氏が支所として使用中だけ寄付すると申し出たのである。このように多くの人々の努力で支所は設立されたのである。

翁の業績の偉大さは言うまでもないが、そのかげに多くの人々の援助があつたことも見のがせない。翁の夫人は、外ばかり歩いている翁の留守をかため、安心して翁が働けるよう努力したと、弥一氏も語っていた。「百までは大丈夫生きる」と言っておられた翁の意志力と強健な体力のほかに、夫人の内助の功は、翁の活躍の一大原因ではなからうか。

高崎治平翁は親切で人情深かつたということは、翁を知る人の大多数の声であつた。他人に何か頼まれば、自分に出来ることならどんなことでも引きうけたという。結婚の世話を引き受け、また、種々の紛争の調停もした。土地の境の争いとか、利息をまけてくれという争の調停をしたときには、自分の金を出してまでも解決したこともあるという。

人情深い一端として冊子中に、

一、明治三十六年二月自家講習中成績優良ナル者ヲ選抜シテ東京蚕業講習所に入學セシメ學費ヲ補給シ研究セシム
という記事がある。井上惣助氏も學費の一部を補助してもらひ東京蚕業講習所に學んだ一人である。

翁の仕事熱心は言うまでもない。事業に対する積極性から、良いもの、ためになるものはすべて採り入れた。桑の品種でよいものがあれば、いくら高価でも買いいれる。鶏の改良にも率先、事にあたった。改良に自分の金銭を惜しまず使ったことは、財産をなくすようになった一因でもある位である。

親切で人情深く、人々の幸福を願っていたのであれば、財産をなくすのは無理からぬことである。おだやかで人と争うのを好まぬ性格は一層そのような結果を招いたともいえよう。養蚕のひまをみてヨリヤをしていた時代もあるが、商売でごまかされても、強いて争ってまで金をとりたてようとしたことはなかったという。茶の商をしていた時代でも、他人に借ができると、自分の持物を売り払っても支払いをしたという。井上惣助氏の少年時代に翁は二回か三回破産したらしいが、惣助氏は親につれられて、翁のはらしいものの日を一度見たことがあるという。

翁は酒はやれたが、止むを得ぬ場合の他は決して飲まなかったという。

翁の事業に対して全く迫害がないということもなかった。「高崎が又はやりものをしたよ」とか「高崎が又なにかをはじめたからその値が下がる」とか冷笑されたこともあったが、翁は人のうわさには少しもこだわらず、自分の信ずる道を進んで行ったという。

井上惣助氏は翁のおかげで楽しい俸給生活が出来たと一生感謝してると言っていた。このように翁を尊敬する人々の気持は、高崎治平翁頌徳碑の建立となって具体的にあらわされている。頌徳碑を翁の生前にたてた（昭和十一年十二月と思われる）のも、翁を尊敬する人々の止むに止まれぬ気持から出ているのである。

翁はよく「碑というものは神社か寺の傍にたてるものだ」と言っていたという。それで頌徳碑を建てる時も神明社の境内の一部という予定だったが、都合によって田村氏の寄付した土地に碑を建てたという。その時翁の意見により、碑建立の十日前に蚕の神をまつり、その後碑をたてたという。

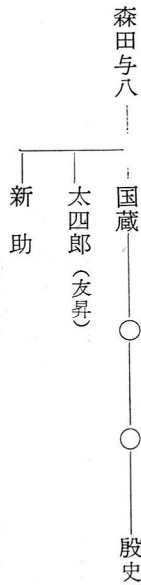
「道を通る時はぬかるみを通り、よいところは他人に通らせよ」「道で他人に会ったらどんな人であってもこちらから挨拶せよ」と子息弥一氏に教えられた翁は、自ら身をもってぬかみを歩き一生を終わったものと言えよう。報徳精神を他人に強要せず、自らの道として人生を歩んだのである。

翁は昭和十二年二月十六日、軽い脳充血のため、その八十四才の生涯を閉じたのである。

二 森田友昇

福生町中福生、森田殷史氏宅の庭に、友昇塚と刻まれた碑が建っている。これは俳聖松尾芭蕉直系第八代を襲いで、明治俳壇に高名を馳せた友昇、森田太四郎氏を記念したものである。以下、森田殷史氏の蔵する書籍、書簡、遺品ならびに森田氏の談話をもとにして友昇について記してみよう。

現在の森田殷史氏宅は、元禄時代より明治初年まで、中福生大学と称した漢学塾であったという。友昇森田太四郎翁は、天保五年三月十六日この地に生まれた。森田与八氏の二男である。



少時より経史を学び、俳諧を好み、福生村の田村氏（酒造の先祖）に俳諧の道を問い後江戸に出て、富所西馬の門に入って更に学んだという。

福生・八王子・横浜等に住んだが、横浜に住んでいる間、明治十二年、松原庵四世宗匠となり、深川芭蕉庵の什器

であり、蕉翁六物の一である瓢名四山の瓢と共に、芭蕉直系第八代を襲いだのである。それ以前の明治八年には、政府より大講議俳諧教導職を授けられている。なお松原庵四世宗匠の襲名の式は八王子市の大善寺で行なっている。

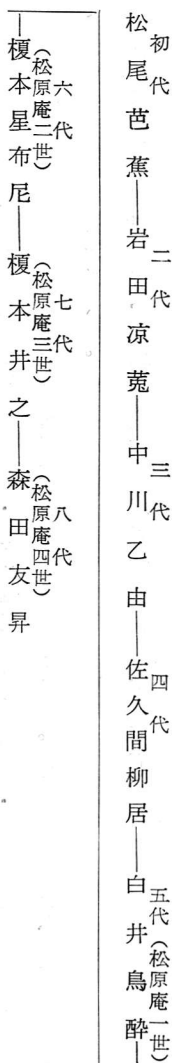
長兄国蔵氏は四十才代で死亡していたので周囲の者はそのあとに直るようすすめた。友昇はそれを嫌って諸所を歩きはじめたとも言われ、渋谷に住んでいた弟の国蔵宅へも時々たちよったという。

その生涯を通じて娶らず、酒を愛し旅を愛した。そして明治二十七年飄然として行脚の草鞋を履くや、行雲流水と共に還らず、数奇な運命を辿ったという。

従って蕉門直系も八世で、松原庵も四世でそのあとを絶ってしまったのである。

殷史の話によっても、友昇がいつ何処でこの世を全うしたかは、言い伝えもなく記録もなく不明であるという。

森田友昇系譜は左の如くである。



友昇の俳諧の道での弟子・北村透谷は明治二十六年十月自殺をとげている。その自殺がなんらかの影響を師、友昇に与え、それで、友昇も飄然と旅にのぼり、そのあとを絶ったのではないかと考えられる。

明治画壇にその名を馳せた女流画家奥原晴湖は、友昇の内妻であったといわれる。

友昇の友人には、落合直文、仮名垣魯文、大沼枕山等の有名人がいたといわれ、なお俳諧の道の弟子には前記北村

透谷の他に尾崎紅葉もその名を連ねていたという。その他友人には島田三郎（代議士）・山東直砥（神奈川県令）・僧弁玉・平塚梅花（漢学者）・中村敬宇・鱸松塘・小野湖山・森槐南・山蔭貫石・柳田正斉（書家）、画家の友人として平野五岳・服部波山・滝和亭・松岡環翠等がいた。山蔭貫石は書家で、神明社、ならびに中福生の祭りのぼりの字を書いた人、のぼりは現在使用しているものである。

殷史氏宅には芭蕉の系図、芭蕉十哲図（渡辺華山筆）・芭蕉涅槃図（桜井梅室筆）・雲竹書卷（芭蕉の書の師、北向雲竹の書いたもの）・芭蕉の書簡その他の書画短冊等が数千点あるとのことである。それらの資料を、大学教授や専門家が使用して、諸種の研究論文を記している。

友昇塚は昭和二十八年十一月三日、友昇の偉大な業績を顕彰し永く後世に遺し、かつその冥福を祈るため、友昇翁遺愛の矢立、筆硯、短冊等を函に納め、翁誕生の地の庭に埋め、その上に碑を建てたものである。

友昇の句集は多々あるが、友昇が明治十二年松原庵をついだ時の記念の句集浅川集は今も殷史氏宅に残っている。なお、明治八年に友昇は横浜名所案内という書物をあらわしている。この本を、学習に使用した小学校もあったという。この本も殷史氏宅に残っている。なお、浅川集も横浜名所案内も、はじめ版本も残っていたが火事で焼けてしまったとのことである。

最後に友昇作の句を記してみるが、これは友昇の代表作という意味ではない。ただ漠然と十句、記してみるだけである。

下戸ならば何に紛れん秋のくれ
唯か汲む野中の井戸や注連飾
風の日はこぼれるようぞ萩の花

梅ちるや寝耳に寒き風の声

月涼し田毎にあまる水の音

鶯や師に不足なき今の声

生酔のひとり交りぬすずみ堂

麦の水藪をめぐりて流れけり

置炬燵じゃまな柱もなかりけり

ひと峠越えてのさきも清水かな